

児童がつくりだす喜びを感じるアメリカの図画工作科学習の研究

—— アメリカの指導方法や美術館のあり方を通して ——

前ニューヨーク日本人学校 教諭

福岡県久留米市立西牟田小学校 教諭 平野 卓

キーワード：アメリカ、アート科、図画工作科、移動教室、つくりだす喜び

1. はじめに

アメリカは、住宅街や公園、駅、電車の中など至る所にアートが存在していて、アートが街と共存している。また、アメリカ人には、「アートを楽しむ」「アートは生活の一部」という姿勢がある。アメリカでは、アートは人間性を豊かにするものであり、日々の生活を豊かにするものとして位置づけられていると感じる。アメリカ人のアートに対する姿勢や感覚はどこから生まれているのか不思議に感じた。これは、児童のころからアートに触れる機会が多く、さらに美術館が身近に存在しているのではないかと考えた。また、学校の指導方法にも違いがあるのではないかと考えた。

2. ニューヨーク日本人学校のアート科と児童の実態

(1) ニューヨーク日本人学校のアート教員

ニューヨーク日本人学校のアート（図画工作）科の授業は、アメリカ人教師が担当している。

勤務歴：ニューヨーク日本人学校 10 年目

教員歴：10 年（料理雑誌の編集者をしてきた経歴をもつ）

教員免許：あり

授業で大切にしていること：作品を作るときに、児童に安心感を与えることを大切にしている。児童は、芸術に関する大きな能力をもっている。しかし、「これでいいのかな」「上手に描けているのかな」と作品作りに怖さを感じると、児童は自分の芸術に関する力は発揮できない。そのため、作品を作るときに安心感を与えることを大切にしている。

(2) ニューヨーク日本人学校のアート科授業時数

ニューヨーク日本人学校のアート（図画工作）科の授業時数は以下の通りである（資料①参照）。授業時数は学習指導要領に準じている。

1 年生：週 2 時間 2 年生：週 2 時間 3 年生：週 2 時間 4 年生：週 2 時間 5 年生：週 1.5 時間

6 年生：週 1.5 時間 7 年生：週 1.5 時間 8 年生：週 1 時間 9 年生：週 1 時間

〈資料① ニューヨーク日本人学校のアート科授業時数〉

(3) ニューヨーク日本人学校のアート（図画工作）科に関する児童の実態

日本在勤中、毎年、図画工作についてのアンケートを行ってきた。また、ニューヨーク日本人学校の児童にもアンケートを行ってきた。その結果、ニューヨーク日本人学校の児童の方が、日本在住の児童よりも、図画工作科が好きな人数は多いことが分かった（資料②参照）。

福岡県内小学校（2012～2014 年） 第 5・6 学年 好き：58 普通：22 好きではない：13

ニューヨーク日本人学校（2015～2017 年） 第 3・5 学年 好き：40 普通：3 好きではない：0

〈資料② 図画工作科に関するアンケート結果〉

また、「日本とアメリカのアート（図画工作）科の授業では、どちらが好きですか」というアンケートを行った。圧倒的にアメリカのアート科の授業の方が好きという結果（アメリカ：30、日本：1）が出た。

アート（図画工作）科の学習が好きな理由に、「アメリカには、アート科移動教室があるから」「日本の図画工作科の授業は決められたことをしなければならず、アメリカのアート科の授業は、自由にできるから」「楽しい活動が多い」とあった。また、日本の学校に通っている時よりも図画工作科の学習が好きな理由に、「自分が作った作品を、先生や友達が認めてくれる」「アート科移動教室に行き、いろいろな作品を見ることができるのが楽しい」などがあった。つまり、ニューヨーク日本人学校の児童は、「図工の学習が大好き。日本の学校よりも自分の作品が認められたり、美術館などで有名な作品を見たりすることができる」という気持ちを持ちながら、図画工作科の学習に取り組んでいると言える。

3. 主題と研究の目標について

(1) 主題について

①児童がつくり出す喜びを感じるとは

児童は、アートの授業が大好きである。つまり、主体的・意欲的に学習に取り組んでいるということである。アート（図画工作）科の授業で、満足感や達成感を得たときに、アート（図画工作）科の学習が好きであると感じる。このように満足感や達成感を感じ、図画工作科の学習が好きであると感じることができる状態にあることを「児童がつくり出す喜びを感じる」とする。

②アメリカの図画工作科学習とは

アメリカには、様々な学校が存在する。カリキュラムも異なるし、それにより指導方法も異なってくる。今回の研究では、アメリカの図画工作科学習をニューヨーク日本人学校で行われているアート（図画工作）科学習のこととする。

③アメリカの指導方法や美術館のあり方とは

アメリカの指導方法は、ニューヨーク日本人学校アート科担当教員が行っている指導方法とする。また、美術館のあり方とは、日本とアメリカの美術館のとらえ方の違いから研究を進めていく。

(2) 研究の目標

日本の児童がさらに図画工作が好きになるヒントがアメリカのアート（図画工作）科の授業にあると考える。そこで、ニューヨーク日本人学校のアート（図画工作）科の授業実践やアート科移動教室、美術館のあり方を通して、たくさんの児童がつくり出す喜びを味わっているアメリカの図画工作科学習を研究し、日本の図画工作科学習にいかす必要があると考え、本主題を設定した。そこで、本研究は、アメリカ人教師による図画工作科の指導方法やアート科移動教室、美術館のあり方を通して、アメリカの図画工作科について研究・考察することを目的とする。

4. 研究の内容

(1) ニューヨーク日本人学校のアート科授業実践【題材名：How do artists see?（5年生）】

[授業の実際]

①映像を見て、作品作りのイメージを膨らませる活動

児童は、プロジェクターの映像や画像を見て、作品作りへの思いを膨らませていった。更に、作品作りへの思いを膨らませるために、実際のアーティストの作品を見た。「面白い動物を版画で表現したい」という思いや感想が強く出てきた。

②作品作りの見通しをもつための活動

児童が作品作りの見通しをもつために、どのような順番で活動していくのか最後まで説明を受けた。活動の

見通しをもつことで、児童は安心して作品作りをすることができる。アート科担当教師が大切にしている「作品作り安心して取り組ませること」の手立てである。

③描きたい動物を選ぶ活動

描きたい動物を選ぶ活動を行った。動物の多くの写真を準備し、児童が安心して描くことができる手立てがあった。児童は、自分の描きたい動物の写真を嬉しそうに選んでいた。「どんな色にしようか」「どんな形の動物にしようか」など、児童の中には作品のイメージが広がっているように見えた。実際に、児童に尋ねると「丸の形をベースにしたい」「色は赤色がメインの鳥を描きたい」などイメージは広がっていた。

④実際に動物の絵を描く活動

児童は、自分が選んだ動物の絵を描いていった。今回は版画であるため、薄い発砲スチロールに線が残るように書いていった。形に個性を出すために、定規を使い、真っ直ぐ線を引いて動物を描いていった。

⑤色付け活動

薄い発砲スチロールに型が付いたら、色付けを行った。児童が自分のイメージに合うような色を付けることができるように、多くの色を準備していた。児童は、嬉しそうに色を付けていた。その後、刷りの活動を行った。児童は、どんな作品ができるのか笑顔で刷っていた。

[考察]

今回の授業では、児童が怖がらずに安心して作品作りができるように、多くの手立てがあった。「児童がイメージを広げやすいように映像を見せること」「児童が見通しをもって活動ができるように、作品作りの説明を丁寧に行うこと」「児童が自分のイメージに合うような色を付けることができるように、多くの色の準備」などである。この手立ての多さが、児童がつくり出す喜びを味わい、アメリカのアート（図画工作）の方が日本よりも楽しいと感じている要因であると考えられる。

(2) 課題が終わった後の児童の活動

課題が終わった後、児童はアート室の道具を使い、自由に作品を作ることができる。児童は、この活動が大好きである。アメリカのアート（図画工作）科の授業の方が日本より好きな理由の一つに、この課題後の活動があった。時折、日本では児童の作品作り終了の時間を合わせるために、「もっと付け加えてみよう」「この部分の色をもっと塗るといいよ」など、教師都合の声掛けがある。しかし、この声掛けが適切ならいいが、そうでない場合もある。ニューヨーク日本人学校では、課題後の活動もアート（図画工作）科の授業と捉え、作品を作っている。児童は、つくる喜びを感じながら作品作りに没頭している（写真①参照）。課題が終わった後の活動も児童が怖がることなく、安心して作品作りができるように、多くの材料が準備してある。児童が安心して作品作りを行い、つくり出す喜びを味わうことができる手立てである。



写真① 作品作りに没頭している児童の様子

(3) アート科移動教室

ニューヨーク日本人学校では、3年生～8年生までの5学年でアート科移動教室を行っている。アート科移動教室の場所は以下の通りである（資料③参照）。

資料③ ニューヨーク日本人学校のアート科移動教室

学年	場所	学年	場所
4年生	Cooper Hewitt Museum	7年生	Metropolitan Museum of Art
5年生	Yale University Art Gallery	8年生	Isamu Noguchi Garden Museum
6年生	MoMA(The Museum of Modern Art)		

〔Yale University Art Gallery でのアート科移動教室の様子〕

活動内容は、2つである。学芸員によるツアーへの参加と自分の気に入った絵を見つけ、スケッチすることである。ツアーでは、3つの絵画を鑑賞した。学芸員から絵の説明を受けたり、絵を見て感じたことや気付いたことなどを発表したりした。児童は、思い思いに自分自身がイメージするものを友達に伝えたりして、絵の良さに触れた。次に、自分の気に入った絵を見つけ、スケッチした(写真②参照)。描かれている物を細部まで表現しようと、熱心に模写しながら世界的名画を堪能することができた。世界的名画を間近で見ながら、模写をする機会をもつことは日本の学校では難しい。ゴッホやモネ、ピカソなどの作品を、実際に見るだけでなく、間近で模写する機会をもつことができることは、児童の図画工作科に対する考えを変えていると考える。



写真② スケッチの様子

そして、このアート科移動教室を担任だけで行うのではなく、アート科担当の教員と一緒にいうことが、児童にとって大きい。名画を何となく見たり、模写したりするのではなく、見るポイントや模写をするポイントを専門的に教えてもらう機会がある。どんな道具が使われて描かれているのか、作品にどんな思いが入っているのかなど、きめ細やかな指導がある。

Yale University Art Galleryへアート科移動教室では、11名全員が「楽しかった」と感じている。(資料④)は、児童が楽しかったと感じた理由である。アンケート結果より、有名な画家の作品を間近で見ることができるとや実際にスケッチをすることができることが楽しかった理由であったことが分かった。有名な画家の作品を鑑賞できることは、児童にとっても大きな出来事であり、楽しみに感じている。また、作品に関して、友達と語り合うことは、楽しかったようである。さらに、美術館と言っても実際に模写という積極的活動ができたことは、児童にとって楽しかったようである。

ART galleryにはたくさんの系会や物がかさってありとてもきれいだからです。また、見る場所にかぎるあまりなくゴッホの絵やピカソの系会などを近くで見れるのでとても楽しかったです。

資料④ アート科移動教室が楽しかった理由

5. 研究の結果

アメリカ人教師によるアート(図画工作)科の指導方法やアート科移動教室、美術館のあり方など、すべてが「児童生徒はアート(図画工作)が好き」「つくりだす喜びを感じる」という気持ちに繋がっていた。特に、アメリカ人教師によるアート授業は、児童生徒が作品作りに安心して取り組むことができる手立てを多くとっていた。この手立てが、児童がつくり出す喜びを感じるができる安心感に繋がっていた。ニューヨーク日本人学校のアート室には、「We are all artists(わたしたちは、みんなアーティストです)」と書かれている。「児童はアートの素晴らしい能力や表現力をもっている。それを大事にしながら、安心して作品作りを行い、つくり出す喜びを感じてほしい」という思いが、ニューヨーク日本人学校の児童に通じている。研究の成果としては、アメリカ人教師によるアート(図画工作)科の指導実践を調べたことで、日本の図画工作科にない考え方や活動方法があったことは、今後の日本の図画工作科の実践に生かすことができるだろう。また、アート科移動教室は、児童のアー

トに関する思いを変えるぐらい大きなことであり、日本でも美術館への移動教室を考える切っ掛けになった。研究の課題としては、アメリカの授業実践やアメリカのアート科のカリキュラムも調べる必要があったと考える。

アート作品が街中にあることや授業実践の素晴らしさ、アート科移動教室があること、世界的有名な美術館が身近にあることなど、児童が作り出す喜びを味わうことができる要因が多くあった。しかし、一番は教師のアート（図画工作）科や児童への思いであることを再認識した研究となった。